

シリーズ 四国霊場を歩く(1) 四国遍路は世界遺産になりうるか

愛媛大学法文学部教授
四国遍路・世界の巡礼研究センター長
胡 光



ニューヨーク・タイムズ2015から

平成27年（2015）1月、ニューヨーク・タイムズ紙ホームページで、その年訪れるべき世界の52ヶ所が発表され、日本で唯一「四国」が選ばれて、「四国遍路の場所」として紹介されました。以来、外国人遍路の姿は昨春まで確実に増えていました。彼らは必ず、遍路の白装束を着て歩いて遍路をします。彼らが日本の中で四国を選ぶのは、ロストジャパン - 失われた日本の自然や文化を四国の中に求めることが多く、遍路をした後の感想では、四国の自然や人々（「お接待」）への称賛が加わります。私自身も彼らを案内した時には、同様の答えが返ってきました。



室戸岬付近を歩く外国人遍路

ニューヨーク・タイムズ紙では、四国遍路に1200年の歴史があり、特に松山は札所が集中する重要な場所であるとともに、120年前に建てられた楼閣のような日本最古の温泉があると特筆しています。よくできたキャッチコピーで、世界の人々を四国へ、そして松山

へと誘ってくれるようです。しかしそれだけでなく、この文章には四国遍路や道後温泉の特徴が凝縮されているのです。

この記事が出た前年に、四国遍路は開創1200年を迎え、四国4県で記念行事を行い、観光客数も大幅に増加しました。同年は、重要文化財に指定されている道後温泉本館も建設120年を迎えています。本館を建てた大工棟梁坂本又八郎は、幕末に松山城天守閣再建に関わった人物で、当時としては天守閣に次ぐ豪壮な木造建築が出現したのです。

本館が完成したのは、明治27年（1894）日清戦争の年。まさに司馬遼太郎『坂の上の雲』の時代です。翌年、松山中学に赴任した英語教師・夏目漱石は、後に『坊っちゃん』を著し「ほかの所は何を見ても東京の足元に及ばないが温泉丈は立派なものだ」と完成直後の道後温泉の雄姿を記しています。

現在、道後温泉でお遍路さんの姿をみかけることはほとんどありませんが、その歴史をふりかえてみると、本館完成以前には全て



重要文化財 道後温泉本館（開館時の正面入口側）

のお遍路さんが訪れる場所であって、四国遍路と道後温泉を合わせて紹介したニューヨーク・タイムズの記事は意義深いものです。

日本遺産と世界遺産

ニューヨーク・タイムズの記事が紹介された年、四国遍路は、文化庁から日本遺産「四国遍路～回遊型巡礼路と独自の巡礼文化」に、観光庁から広域観光周遊ルート「スピリチュアルな島～四国遍路～」の認定を受けました。これらは新たに創設された制度で、外国人観光客誘致のためのストーリーがいち早く評価されたものです。

四国遍路を含め、四国の観光客入込数が当時として最高を迎えるのは、瀬戸内三橋によって本州と結ばれる1990年代でした。観光客が減少に向かう2000年代には、四国遍路を世界遺産にという運動も、経済界やボランティア団体によって始まりました。しかし、観光客誘致を目的とする日本遺産や広域観光周遊ルートと異なり、世界遺産は自然・文化遺産の保護を本来の目的とします。このため、世界遺産になるためには多くの手続きが必要となります。

現在、我が国の世界遺産には、文化遺産19件、自然遺産4件が登録されています。世界遺産となるためには、文化庁が作成する「暫定一覧表」に掲載される必要があります。この中から、毎年1件ずつユネスコに推薦され、約1年半の審議を経て、世界遺産となります。

世界遺産がない四国では、4県と関係市町、経済界、霊場会、大学、ボランティア団体など産官学オール四国体制で世界遺産推進協議会を組織して、世界遺産化を進めており、愛媛大学でも学術面から支援を行っています。平成28年（2016）8月8日には、4県知事が世界遺産に向けた提案書を文化庁に提出し、「暫定一覧表」掲載を切望しました。

近年では、毎年順調に世界遺産が誕生しているため、「暫定一覧表」掲載数が減少しており、追加掲載への期待が高まっています。その一方で、世界遺産となるためには、①資産の保護措置（日本では文化財指定）、②普遍的価値の証明（世界的に見て唯一無二の価値があること）がなされることが条件となっ

ていて、双方ともその前提には、四国遍路の研究と世界の巡礼との比較が必要であることは言うまでもありません。

日本の世界遺産（文化遺産・登録年順）

- ①法隆寺地域の仏教建造物（1993年／奈良県）
- ②姫路城（同年／兵庫県）
- ③古都京都の文化財（1994年／京都府・滋賀県）
- ④白川郷・五箇山の合掌造り集落（1995年／岐阜・富山県）
- ⑤原爆ドーム（1996年／広島県）
- ⑥厳島神社（同年／広島県）
- ⑦古都奈良の文化財（1998年／奈良県）
- ⑧日光の社寺（1999年／栃木県）
- ⑨琉球王国のグスク及び関連遺産群（2000年／沖縄県）
- ⑩紀伊山地の霊場と参詣道（2004年／和歌山・奈良・三重県）
- ⑪石見銀山遺跡とその文化的景観（2007年／島根県）
- ⑫平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（2011年／岩手県）
- ⑬富士山－信仰の対象と芸術の源泉（2013年／静岡・山梨県）
- ⑭富岡製糸場と絹産業遺産群（2014年／群馬県）
- ⑮明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業（2015年／福岡・佐賀・長崎・熊本・鹿児島・山口・静岡・岩手県）
- ⑯国立西洋美術館本館（2016年／東京都）
- ⑰「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群（2017年／福岡県）
- ⑱長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産（2018年／長崎県）
- ⑲百舌鳥・古市古墳群（2019年／大阪府）



国指定史跡「伊予遍路道」横峰寺道（西条市）

四国4県では、文化財指定のための調査を急ピッチで進めており、平成28年の文化庁への提案は、4県全ての遍路道の中に国指定文化財が誕生したことを背景としています。愛媛県内では、平成28・29年に、伊予遍路道として、稲荷神社境内及び龍光寺境内、仏木寺道、横峰寺道、横峰寺境内、三角寺奥之院、および八幡浜街道笠置峠越が国史跡に、星ヶ森が国名勝に指定されました。平成30・令和元年にも、観自在寺道、明石寺境内、大寶寺道が国史跡に追加指定されています。今後も世界遺産となりうる資産の確定と文化財指定拡張のための努力が続けられていくことでしょう。

愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター

四国遍路に大きな注目が集まっていた平成27年（2015）に、愛媛大学でも、法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センターが開設され、四国はもとより全国でも唯一の巡礼研究センターとして活動を始めました。さらに、令和元年（2019）4月、新たに設置された全学文系センターのひとつとして再出発したことを機に、翌年1月には「四国霊場八十八箇所と遍路道」世界遺産推進協議会普遍的価値の証明部会と連携協定を結び、四国4県への協力機能強化を図っています。

センターには、国内研究部門（歴史文化研究班・現代社会研究班）と国際研究部門が設けられ、歴史学・文学・社会学・法律学・観光学など多彩な分野の教員が所属して、学外の研究者とも協力しながら、四国遍路の歴史や現代社会における遍路の実態を解明し、世界の巡礼との国際比較を行っています。この研究・教育活動は、①四国の文化を世界に発信、②次世代への伝統文化継承、③四国遍路の世界遺産化を学術的に推進するものです。

世界遺産となるためには、地域や国だけでなく世界的にみて、その資産の「普遍的価値」を証明し、かつ今もなお生きた文化である必要があります。このため、四国遍路の特色を古代から現代まで歴史的に明らかにしなければなりません。

四国遍路の大きな特色とは、「周回型巡礼」「大師信仰」「お接待など庶民文化」をあげることができます。宗派を超えて、弘法大師

を信仰しながら、八十八ヶ所霊場を廻り、地域の人々も「お遍路さん」を大師とみなして、もてなします。このような四国の文化に触れた人々は、四国遍路を「お四国」と呼び、何度も廻る人もあります。過去の記録や伝承には、不治の病や怪我が遍路の途中で治ったという話がたくさん伝わっています。彼らが奉納した絵馬などには、奇跡への驚きと「お大師様」への感謝が綴られています。

現代のお遍路さんにアンケート調査をすると、先祖供養や自分探しなど多様な目的が見られますが、一様に四国に「癒し」を求めていることが分かります。阿波・土佐・伊予・讃岐の4ヶ国は、仏教における「発心」「修行」「菩提」「涅槃」の道場に例えられるように、一人であっても弘法大師とともにある「同行二人」の精神で、幾多の困難を乗り越え、結願後には大いなる達成感を得ます。その背景には、四国の自然や文化というものが深く関わっていると考えています。

四国遍路の原型は1200年以上前に若き空海が行ったような、修行僧の修行でした。500年前くらいには、弘法大師の遺跡を庶民が廻るようになり、400年前ころ八十八の札所が誕生します。この時には、各国の主な神社も札所に含まれていました。明治維新の神仏分離令によって、現在の札所寺院へと移行します。お遍路さんの白装束の定着は、戦後の伊予鉄バスツアーから始まることになりました。ほかにも八十八ヶ所はいつ誰が創ったかなど、四国遍路の歴史は多くの謎と魅力に包まれています。私たちセンターの研究活動は、四国遍路が世界遺産になるためにも必要な活動です。

本連載では、四国霊場と四国遍路の歴史について、最新研究をふまえながら分かりやすく紹介するとともに、四国遍路や四国文化、そして四国の魅力についても考えていきます。

【参考文献】

頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川選書、2009

西村幸夫ほか編『回遊型巡礼の道 四国遍路を世界遺産に』ブックエンド、2017

愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020